

浴室を出たりリリの肩にバスタオルをかけると、「ありがと」と言って笑った。

くたびれたライトグリーンの布地が、首から肩の丸みを帯びたラインに沿って彼女の身体を隠している。タオルに包まれてくしゅくしゅと身体を拭く姿がどうしようもなく愛おしくなって、身体が濡れているのも気にせずリリを抱きしめていた。

「拭いてくれるの？」

「んー……そうだね。そうしょっか」

バスタオルの上から起伏に合わせてそつと背中を撫でる。それから、脇、谷間、下乳、へそ、……と水が溜まりそうな場所を順番に拭いていった。セクサロイドは他に比べて凹凸が多いから、整備にも手間がかかる。

「ちよつと、くすぐつたいわね」

ドライヤーは体表からおよそ二十センチ離してまんべんなく、一箇所に当て続けられないように、とにかく動かし続けければ大丈夫……と、古い入門書に書いてあった気がするけど、最近の肌素材はどうなんだろう。ちゃんとサービスロイドを迎えられるような家なら、少なくとも型落

ちのボディドライヤーくらい置いてあるはずだから、あんまり褒められたやり方ではないのかもしれない。

「サナ、ありがとう。私は何を着たらいいかしら？」

「えーと、ちよつと待ってね……」

リリがここに来たときのワンピースは、部屋着にするには流石にもつたない。とはいえ、せつかくなら可愛い服を着てほしいけど、私の在庫にはそんなもの……と、そういえば。

「じゃあ、これ着てみて」

手に取ったのは、さっきまで私が着ていたルームウェアと一緒に買った、少し高めのもう一着だ。紺色のサテン生地を使ったセーラーっぽい襟のワンピースで、控えめな光沢で大人の女性にもおすすすめと紹介されていた。

届いてすぐに試着したものの、思った以上にテラテラする生地が私にはどうにも似合わなかつたので、そのまましまっておいたのだ。

「ええ。ありがとう」

リリは私がいるのも気にせずに、パンツを履いてブラを着け、ルームウェアに袖を通していく。こういう着替

えの瞬間って、裸よりも魅力的だからどうしてもまじまじ見てしまう。

そもそも、サービスロイドの下着って機能的には不要なものだから、もはや生着替えの相手を興奮させる布切れでしかないのだ。彼女のアンダーヘアが濃いのだって、誰かが魅力的だと思ったからわざわざそう手を加えたわけで、私の心を掴んで離さないのも当然といえる。

じっ……と見つめる視線に気づいたリリが「どう？」と裾をつまんでみせた。サテンのルームウェアに包まれたリリはきらきらしていて、やっぱり控えめな光沢のサテンなんて宣伝文句は嘘だったことが分かる。夜の相手を喜ばせるために着るやつだ、これ。

(本編より)

「だからさあ……リリみたいなセクサロイドなら絶対に妊娠しないじゃん。それって、ある種の救いだと思わない？」
リリの今後についてちゃんと考え……と思っていたはずが、気づいたときには完全に飲みすぎていた。人間相手だろうがサービスロイド相手だろうが、初対面で開陳

すべきではない見解を述べている自覚が、私にもある。

食べ物はもちろんお酒も飲まないリリは、晩酌の始まりと変わらない様子で、時折相槌を打ちながら私の話を聞いている。たぶん軌道修正したほうがいいんだろうなと思いつつ、これも一種の感情労働だし、きっとリリも慣れているだろうと勝手に結論づけて、その心地いい雰囲気に身を委ねてしまっていた。

「プレグロイドなら子供を産めるわ。それに、私は子供を育てたりしてみたいって思うけど。変かしら？」

「もちろん、リリみたいな人もいると思う。でもさあ、私は子供なんて産みたくない。育てるのも、たぶん無理。私と同じように考えてる人も、たくさんいるよ」

言い切ったけど、本当のところはどうだろう。個人主義の発展と未婚化・晩婚化の進行は止まらないけど、少子化はむしろ改善の兆しを見せている。ある程度の収入があれば、独身でも配偶子バンクで足りない精子や卵子を購入し、妊娠から育児はプレグロイドに任せっきりにできるようになったからだ。

おかげで、自分が産みたくなくても、自分が育てたくな

くても、子供だけは製造できるようになった。でも、そこまでして子孫を残そうとする理由が、私には分からない。

「だって、人間って結婚して子孫を残さないと滅亡するんでしょ？　じゃあ、結婚したほうがいいじゃない」

「いや、まあ……乱暴に言えばそうなんだけどさ」

リリが不思議そうに首をかしげる。言っていることが全部間違っているわけじゃないんだけど、話が微妙に噛み合っていない気がする。結婚、出産、夫婦円満、子孫繁栄……うーん、初期化の時に古い結婚願望が埋め込まれたのかもしれない。ピンクキャブはいつたい何を考えているんだろう。悪趣味だなあ。

「だから私、サナと結婚するわね」

そう言っつて、リリがぼすん、と私に寄りかかる。記憶喪失のデリヘル嬢に求婚されるなんて……悪趣味だなあ。

「……リリって、ちょっと急だよね」

「だって私、サナが好きよ？」

ほんのり残ったバニラの香りが不意に鼻をかすめて、数時間前まで彼女とめちやくちやなセックスをしていた光景をありありと思い出させる。「いっぱい孕ませてね♥」

「サナの赤ちゃんできちゃうっ♥」……いや、言っていないだろ。

結婚したって子供はできないよ、どこかでもらってくればいいじゃん、みたいなやり取りを何度かしているうちに、一本、また一本と缶が空けられていく。サービスロイドの接待つてすごい。

「ところで、サナ。このお腹の模様、何か分かる？　お風呂のとき、じつと見てたよね」

(本編より)

「どうしたの、サナ？」

隣を向くと、リリが布団にくるまって私を見上げている。枕元に目をやると、紺のサテンと下着がきれいに畳まれていた。あれ、布団の下は裸ってこと？　おかしいなと思いつながら自分の姿を確認すると、私もパンツしか着けていない。かなり飲みすぎていたような気がするけれど、何をしたんだっけ……と、頭を働かせ始めると徐々に後ろから頭痛が追ってきた。

(本編に続く)

広告欄

この作品の完全版は、第三十一回文学フリマ東京で頒布予定の「next kawaii inversion」に収録されています。

